復刻版 愛生〈戦前編〉

愛生 Aisei

全４回配本・全15巻・別冊１【総目次・索引附】

復刻にあたって◆**山本典良** 長島愛生園園長

推 薦◆**中尾伸治** 長島愛生園自治会会長　**廣川和花** 専修大学文学部教授　**松岡弘之** 岡山大学文学部講師

協力◆**国立療養所 長島愛生園　公益財団法人 長濤会**

Venis Vidis Venkis

一九三〇年一一月二〇日、日本ではじめてのハンセン病の国立療養所として岡山県邑久郡、長島に開設された長島愛生園。

創立からわずか半年後、翌年一〇月に早くも発刊された機関誌『愛生』は、戦前・戦時下、そして戦後から現在に至るまで、入所者はもとよりそこに勤務する医官、職員、来訪者や外部の読者が交わる愛生園の「窓」として、永くその役割を果たしてきた。

誌上は明石海人、志樹逸馬はじめ入所児童によるものまで、ほとばしる情熱を伝える短歌、詩、俳句、歌謡、小説の発表の場であり、また療養所の日々の生活が活写される類例のない貴重な記録にあふれている。

このたび不二出版は、長島愛生園の協力を得て、『愛生』創刊号から戦争で休刊となった第14巻第7号（一九四四年七月）までを復刻、刊行する。

この『復刻版「愛生」戦前編』全15巻が、ハンセン病療養施設における「療養」の営み、その実像に近づくための基礎資料となることを願っている。

――不二出版編集部

窓を開く使者

――表紙の三つのVは当園の標語 Venis Vidis Venkis（来り、見、勝ちたり）のVである。

「愛生」はこの大家族の窓である。

我々はこれを通して美しい空を眺め、新鮮な空気を得、この窓から人類兄姉に呼びかける。……この愛生の窓から世の労（つか）れし人、悩める人に一ぱいの生命の水を与へたい。

窓である。窓である。しかし「飾窓（ショウウィンドウ）」であってはならぬ。

それは心をぶちまけた霊の窓であり、真の愛の窓であれ。

（『愛生』創刊号、編集後記より）

不二出版

写真：島 隆諦

復刻版 **愛生**（戦前編）全４回配本・全15巻・別冊１（総目次・索引附）

復刻にあたって◆**山本典良** 長島愛生園園長

推薦◆**中尾伸治** 長島愛生園自治会会長
廣川和花 専修大学文学部教授
松岡弘之 岡山大学文学部講師

協力◆**国立療養所 長島愛生園・公益財団法人 長濤会**

揃定価◆316,800円（揃本体288,000円＋税10％）
体裁◆A5判・上製・布クロス装・総約6900頁
別冊◆総目次・索引／約250頁（予定）／**定価3,300円**（本体3,000円＋税10％）
ISBN978-4-8350-8456-5（2021年11月刊行予定）
収録底本◆『愛生』創刊号－第14巻第7号（1931年10月－1944年7月）、『青年愛生』第1号－第4号（1933年6月－9月）長島愛生園 発行
お薦め先◆医療史、社会史、ハンセン病文学、社会事業史、近現代史等の研究者、大学・専門・公共図書館

配本／刊行予定／定価／ISBN－No（978-4-8350）	巻数	収録号数／発行年月
第1回／2021年7月 **揃定価 62,700円**（揃本体57,000円＋税10％） 8436-7	第1巻	第1号（31年10月）―第7号（34年7月）
	第2巻	第8号（34年8月）―第12月号（34年12月）
	第3巻	第5巻第1号（35年1月）―第5巻第6号（35年6月）
第2回／2021年11月 **揃定価 86,900円**（揃本体79,000円＋税10％） 8440-4 別冊（総目次・索引）	第4巻	第5巻第7号（35年7月）―第5巻第12号（35年12月）
	第5巻	第6巻第1号（36年1月）―第6巻第5号（36年5月）
	第6巻	第6巻第6号（36年6月）―第6巻第10・11号（36年11月）
	第7巻	第7巻第1号（37年1月）―第7巻第5号（37年5月）
	第8巻	第7巻第6号（37年6月）―第7巻第11・12号（37年12月）
第3回／2022年2月 **揃定価 83,600円**（揃本体76,000円＋税10％） 8445-9	第9巻	第8巻第1号（38年1月）―第8巻第12号（38年12月）
	第10巻	第9巻第1号（39年1月）―第9巻第12号（39年12月）
	第11巻	第10巻第1号（40年1月）―第10巻第12号（40年12月）
第4回／2022年5月 **揃定価 83,600円**（揃本体76,000円＋税10％） 8450-3	第12巻	第11巻第1号（41年1月）―第11巻第12号（41年12月）
	第13巻	第12巻第1号（42年1月）―第12巻第12号（42年12月）
	第14巻	第13巻第1号（43年1月）―第13巻第12号（43年12月）
	第15巻	第14巻第1号（44年1月）―第14巻第7号（44年7月）附『青年愛生』第1―4号（33年6―9月）

※発行年月はすべて西暦表記。ただし（1-9）を省略。

「空から見た長島」写真：島 隆諦

近現代日本ハンセン病問題資料集成
戦前編 全８巻
編・解説◆藤野豊　推薦◆内田博文・川上武・神美知宏・斉藤美奈子・徳田靖之・永岡正己
Ａ４判・Ｂ５判／上製／総 2968 頁
揃定価 209,000 円（本体 190,000 円＋税 10％）

第1回配本	**揃定価 110,000 円**（揃本体 100,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-2894-5
	第１巻 1876～1917 年・解説／第２巻 1918～1931 年 第３巻 1932～1934 年／第４巻 1935 年
第2回配本	**揃定価 99,000 円**（揃本体 90,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-2899-6
	第５巻 1936～1937 年２月／第６巻 1937 年３月～1938 年 第７巻 1939～1944 年／第８巻 帝国議会資料

近現代日本ハンセン病問題資料集成
戦後編 全 10 巻
編・解説◆藤野豊　推薦◆石川一雄・川田悦子・谺雄二・清水寛
Ａ４判・Ｂ５判／上製／総約 4000 頁
揃定価 264,000 円（本体 240,000 円＋税 10％）
別冊（解説・総目次・索引）**定価 2,200 円**（本体 2,000 円＋税 10％）
ISBN978-4-8350-5198-X ■分売可※戦前編解説も含む

第1回配本	**揃定価 82,500 円**（揃本体 75,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5185-8
	第１巻 重監房廃止・プロミン獲得運動と自治会の新生 第２巻「癩予防法」改正問題Ⅰ／第３巻「癩予防法」改正問題Ⅱ
第2回配本	**揃定価 82,500 円**（揃本体 75,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5189-0
	第４巻 戦後無らい県運動／第５巻 竜田寮児童通学問題Ⅰ 第６巻 竜田寮児童通学問題Ⅱ
第3回配本	**揃定価 99,000 円**（揃本体 90,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5193-9
	第７巻 癩刑務所・留置所設置問題／米軍占領下沖縄・奄美のハンセン病政策 第８巻 藤本事件／第９巻 生活改善・反差別運動／第 10 巻 国会議事録／別冊（解説・総目次・索引）

近現代日本ハンセン病問題資料集成
補巻１－19
編・解説◆藤野豊（１－５、８、９、12－15）・訓覇浩（８）・清水寛（７）・平田勝政（７、16）・江連恭弘（10）・大竹章（11）　Ｂ５判・Ａ４判／上製

第1回配本	**揃定価 39,600 円**（揃本体 36,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5420-2
	補巻１・２ 外島保養院年報
第2回配本	**揃定価 82,500 円**（揃本体 75,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5423-7
	補巻３ 本妙寺事件・九州療養所関係・自治会沿革史／補巻４ 大島療養所自治会日誌（戦前編）／補巻５ 世界のハンセン病政策・近代初期日本のハンセン病
第3回配本	**揃定価 110,000 円**（揃本体 100,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5569-1
	補巻６ 私立療養所／補巻７ 台湾におけるハンセン病政策／補巻８ 療養所長会議関係書類／補巻９ 隔離政策の強化
第4回配本	**揃定価 82,500 円**（揃本体 75,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5574-8
	補巻 10 ハンセン病と教育／補巻 11 らい予防法闘争期の自治会日誌／補巻 12「癩予防法」改正問題Ⅲ
第5回配本	**揃定価 82,500 円**（揃本体 75,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5578-7
	補巻 13 生活改善・反差別運動Ⅱ戦前期委任統治領「南洋群島」のハンセン病政策／補巻 14 戦後無らい県運動Ⅱ／補巻 15 戦後無らい県運動Ⅲ・生殖管理政策／別冊（解説・総目次〈補巻１－15〉）
第6回配本	**揃定価 88,000 円**（揃本体 80,000 円＋税 10％） ISBN978-4-8350-5687-6
	補巻 16－19『日本 MTL』『楓の蔭』第 1-264 号／別冊（解説・総目次・索引）

不二出版
〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL 03-5981-6704
FAX 03-5981-6705
振替 00160-2-94084

表示価格はすべて税別

復刻にあたって

山本 典良

このたび不二出版にお願いし、『復刻版「愛生」戦前編』をこのようなかたちで出版できたことに、あらためて感謝を申し上げたい。私は長島愛生園の八代目園長を拝命している。愛生園は二〇二〇年一一月二〇日に創立九〇年を迎えた。本年三月二七日には、八五名の入所者と初代園長・光田健輔（一八七六―一九六四）が大阪から海路で長島に上陸してから九〇年となる。私は五年前から園長を務め、入所者であるハンセン病元患者に日々寄り添ってきたつもりである。今回、創立九〇年にあたり、あらためて長島の風景を眺めた。そして時間をかけ、納骨堂に眠る約三七〇〇名の患者たちに想いを馳せた。彼らが叶えたかった一番の願いは、発病した後も生まれ育った土地で家族に見守られ、親しい者と共に療養生活を送ることだっただろう。そして現在、入所しているハンセン病元患者の想い、コロナ禍を憂い、やるせない気もちでいるその想いとはなにか。それは、病気による偏見や差別、誹謗中傷の歴史を繰り返してほしくない。そうしたことは自分たちで最後にしたいということである。この想い、この願いを後世に伝え、多くの人に愛生園を訪れていただき、これまでの社会のあり方への反省と新しい時代への誓いを促したい。そのためにも、ハンセン病療養所の歴史に偽りや隠ぺいがあってはならず、そこにある真実をできるだけ正確に知ったうえで、一人ひとりの国民が反省し、誓いを新たにする場所となること。それが亡くなった人々への慰霊だと私は感じている。ハンセン病患者が被害者であったことは揺るぎもない事実である。その事実を踏まえたうえで、国家やハンセン病療養所がとるべき道として、何がベストであったのか。当時の患者に想いを馳せ、彼らがどのような境遇で何を感じ、何を願ってきたのか。創刊号にはじまる戦前期の『愛生』こそは、それを探るためになくてはならない重要資料である。

『愛生』には、隔離される立場にあった入所者の文芸作品が多く掲載されている。国立療養所長島愛生園の船出、そして雑誌『愛生』の創刊。患者にとって長島愛生園はまさに、「現実」そのものであった。入所者の一人は創刊号にこう記す。「私達は『愛生』を使者として、……魂を持つ人間として、世人に対する徳義を『愛生』に托して呈（おく）りたい」（YT生「『愛生』創刊に就いての漫語」）。『愛生』は入所者にとって、その「現実」と世間、外の世界とを行き来する「使者」だったのだ。『愛生』に掲載された詩、俳句、短歌、小説などは、多くの投稿から選ばれた珠玉の作品であったろう。なにより著者である入所者一人ひとりの、声なき叫びや魂が込められており、「ハンセン病文学」という枠組みをこえた豊穣さを感じる。入所者にとってこれらの作品は、本名を名乗る必要もなく、世間との関係がつくれる唯一の手段であり、生き甲斐であり希望であった。本誌に触れれば誰であっても、強く何かを感じるに違いないと私は確信する。入所者の魂が込められた『愛生』という雑誌が、それ自体としてひとり歩きをはじめてほしい。そうした期待を込めて、復刻出版というかたちで、『愛生』という「窓」（創刊号「編集後記」）を開ける心持ちである。

創立期の『愛生』を読んでいると、私自身が八〇年以上も前の愛生園に引きずり込まれるような気がする。そこでは目の前に光田健輔がいて、彼を囲むように入所者と職員がおり、ともに語らい、協力して病気に立ち向かっている。光田はそこで私に、「君はこの歴史をコロナ禍に活かせるかね」と不敵に微笑みながら語りかけてくる。今回の出版によって、人びとがあらためて『愛生』をひも解き、歴史の深層を知ることこそが、ハンセン病患者の慰霊に、さらには国民の反省とあらたな誓いにつながると確信している。過去があっての現在であり、未来であるとの想いを強くしている。

（やまもと のりよし・国立療養所長島愛生園園長）

●推薦します●

故郷を歌い込む日

中尾 伸治

このたび、不二出版において、『愛生』誌の創刊号（一九三一年一〇月号）から、昭和一九（一九四四）年、第二次世界大戦激化のためやむを得ず休刊にいたる第一四巻第七号までを復刻していただくことになりました。

『愛生』誌は入所者に潤いを与える場所として誕生し、発言の場となり、職員との交わりも含め愛生園からの発信の場にもなりました。紙面に表された文章などは、開園間もない愛生園への夢を語り、また、地方の同病者への呼びかけなども投稿されていますが、生活が落ち着きをみせるとともに文芸活動も盛んになっていく模様が映し出され、開園以来、日ごとに増えていったであろう少年少女の文芸も、折々に掲げられるようになっていきます。そうした活動のなかにおいて『白描』（明石海人歌集、改造社、一九三九年）や『望ヶ丘の子供たち』（長島愛生園教育部編、山雅房、一九四一年）のような冊子が発行され、好評を得ました。

また、無らい県運動を促す文章や、小川正子先生の土佐紀行なども寄稿されていますが、戦時色が増してきた昭和一三（一九三八）年頃からは、戦時協力体制が成り立ってゆく様子が色濃く表われます。自助会（自治会）の解散を伝える記事には驚かされます。

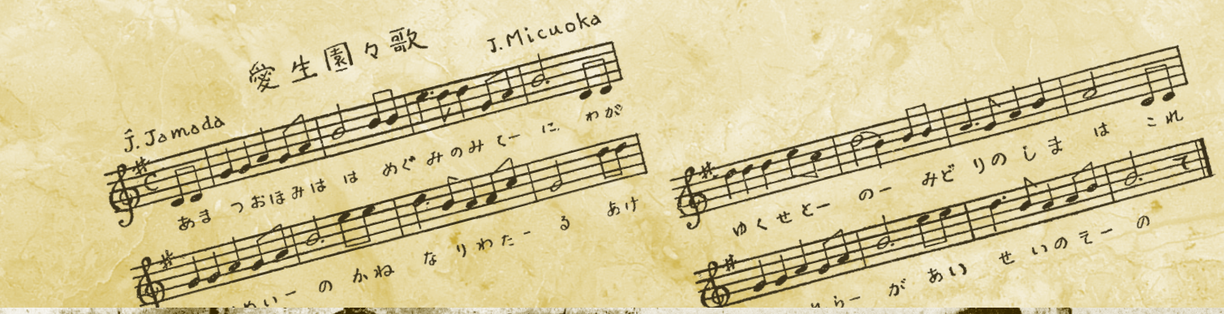
『愛生』誌のなかには、開園時からの歴史、らい撲滅の呼びかけ、嬉しいこと、悲しいことが掲載されています。それはこの復刻版に閉じ込められています。だから今、現在の目でもう一度振り返って活用してもらえると嬉しく思います。

創刊号に投稿された詩に、自分自身を重ねて読んだ、無名氏の三行詩があります。

松、松、松の長島で
くぬぎの武蔵野を
しのんで居ます

これは全生病院（現在の多磨全生園）から開拓患者として愛生園にきた方の詩ですが、自分の古里をしのぶのではなく、以前いた療養所を詩（うた）われたことに、偏見、差別を背負って療養している人々が、故郷を歌い込める日を待っていたことが、感じとれます。

（なかお しんじ・長島愛生園自治会会長）



■右頁下：開園記念式典後の作業風景（第8巻第3・4合併号表紙）／左頁右下：「麓山」でのピクニック の様子（第2号表紙）／左頁左下：愛生園で使用する義足を印度の療養所に寄付（第5巻第3号口絵）／左頁中：「愛生園々歌」楽譜（第2号口絵）

■「敬天愛生」と書かれた習字が貼り出されている（愛生学園、1933年、長島愛生園蔵）

■ 自然石に「望ヶ丘」と揮毫。中央は光田健輔。（1940年頃、長島愛生園蔵）

●推薦します●

新しいハンセン病史像の構築

廣川 和花

不二出版から刊行された『近現代日本ハンセン病問題資料集成』戦前編全8巻・戦後編全10巻・補巻全19巻（二〇〇二-〇九年、以下『資料集成』と略す）は、近現代日本のハンセン病に関する基本資料を網羅して提供し、国家賠償請求訴訟で大きな注目を集めた後のハンセン病問題の学術研究に大きく寄与した。熱く盛り上がった訴訟の過程では、日本のハンセン病政策をホロコーストに擬するような壮大な加害と受難の物語も提示されたが、そうした物語がややもすれば善悪二元論的な見方を助長し、全国横断的で画一的なハンセン病史像を形成したことは否めないだろう。地理的アクセスの容易さゆえに、多磨全生園が国立ハンセン病療養所として一般化・類型化されがちな面もあった。

しかし、この『資料集成』に収められた個別の療養所やその入所者、そしてそれをとりまく地域社会に関する資料は、実はそうした画一的なハンセン病史のイメージを克服する可能性をもっていた。実際のところ、現在の研究では、ハンセン病にまつわる歴史上のできごとを解釈して「隔離」や「差別」の歴史叙述に収斂させるのではなく、個々の療養所において施設側と患者側との間で展開された実践や交渉による解決策の模索、それを通して築かれたさまざまな固有の関係性、そして療養所間でのそれらの要素の共通点と差異の解明が焦点となっている。

日本のハンセン病療養所は、権力が患者を「隔離」する先としてつくり出された場でありながら、同時にそこに収容された患者自らが「療養」する場として、行為主体の転換が起きるという特徴を有していた。近代日本の医療と公衆衛生政策のなかでは、しばしばこの「隔離」と「療養」が表裏一体の関係として立ち現れてくる。「療養」へと転換したハンセン病「隔離」の内実は、医療を受給し生活を営む主体――「殲滅」される客体ではなく――としての、入所者の「生きること」そのものであった。

このたび復刻される『愛生』は、長島愛生園という、全国一三カ所のそれぞれに固有の沿革をもつ療養所のひとつで展開された「療養」の営みを、多面的に伝える資料である。施設側と入所者側の双方が、あるべき「療養」の姿を追い求め、実践した軌跡であるといえよう。ハンセン病療養所一般ではなく、愛生園の歴史が、そこにはある。

療養所の機関誌は、施設側のプロパガンダ的機能が注目されがちである。もちろん、間違いなくそうした性格を有しているのであるが、そもそもどの程度、患者と当局側双方の「自由」な言論が誌面で展開されているのかということ自体、十分に研究されているとはいえないのではないか。むしろそうした型どおりのプロパガンダの陰で展開されている医療と生活の営みの現実にこそ、目を向ける必要があるのではないだろうか。この『復刻版「愛生」戦前編』を活用した、「被害者の歴史」とも「闘争の歴史」とも異なる、新しいハンセン病の歴史像の構築に期待したい。（ひろかわ わか・専修大学文学部教授）

●推薦します●

『愛生』に耳を澄ます

松岡 弘之

長島愛生園は一九三〇（昭和五）年、初の国立ハンセン病療養所として岡山県邑久郡裳掛村大字虫明（現・瀬戸内市邑久町虫明）に開設されました。『愛生』はその定期刊行物であり、一九三一（昭和六）年一〇月の創刊以来、戦中・終戦直後の休刊をはさみながらも今日まで書き継がれて八三〇号に達しました。九〇年を過ぎた愛生園の歴史をひもとく、基礎資料のひとつといえるものです。

創刊号で、ある患者が、かつては何度も死を望みながらも今は療養所に生きる喜びを世の人びとに届けたいと述べたように、この小さな雑誌は療養所が患者の「楽園」であることを伝えるために発刊されたといえます。開設時四〇〇名だった定員は、当時の「啓発」や十坪住宅という民間からの善意の寄附に後押しされて急速な膨張をつづけました。その一方で、患者を救うためとして、療養所では多くの痛ましいできごとが人知れず正当化されていました。一九三六（昭和一一）年八月に、入所者が幹部職員の更迭と自治を求めて蜂起したことは、あるべき療養所と現実のそれとの乖離を厳しく問うたものであったといえます。この長島事件をへて自治を獲得した入所者は、矛盾や葛藤をはらみつつも、療養所の向上のために力を尽くしました。それは戦争のなかでいったん療養所に返還されることになりますが、さらに戦後から現在へとつながる当事者運動の原点をかたちづくるものとなったのでした。

発病によってそれまでの生活を失った入所者は、それぞれに肉体的・精神的な苦しみを抱えながら、医療と生活をめぐる人間関係が複雑に交錯した療養所という空間を生きていました。長島は、瀬戸内の豊かな自然に囲まれた穏やかな島です。しかし、それは決してあなたにとって遠い場所のことではありません。入所者、職員、そして療養所にさまざまな立場で関わった多くの人びとの言葉に耳を澄ますことは、あなたが、あるいはあなたの大切な人が病いを得てしまったがために突然生き別れねばならなかったとき、何に希望を見い出すことができるかを、また、そうした苦難とともに生きる人びとに手をさしのべるとはいかなることであるかを、あなたに迫るものとなるでしょう。

一時は二〇〇〇名以上となった入所者も、現在は一三〇名を下回り、平均年齢は八七歳を超えました。療養所から近代日本を静かに深く問いつづけた人びとの存在が、この復刻された『愛生』を通じて、多くの方がたに届くものとなることを願っています。

（まつおか ひろゆき・岡山大学文学部講師）

■ 医官として長島愛生園に勤めた小川正子（1902-43）は『愛生』の連載をまとめて『小島の春 ある女医の手記』（1937）を出版、後に映画化され、大きな反響をよんだ。右から「映画“小島の春”感想特集」（第11巻第3号表紙）、小川正子「土佐への旅」（第6巻第2号）、「小川正子追悼号」（第13巻第6号表紙）。
■ 左は『愛生』附録として1933年6-9月に、4号のみ発行した『青年愛生』（第3号）の表紙（第15巻収録）。

■『愛生』表紙：右上より、第9号／第5巻第5号／第6巻第2号／第6巻第6号／第8巻第10号／第10巻第12号／第12巻第7号／第14巻第7号。第6巻第2号の特集は「四国の癩を救へ」とある。

●内容見本●

愛生園の創設——

長島の撰擇

長島愛生園長　光田健輔

長島が國立癩療養所の建設適地として撰擇せらるまで長い年月を要した。私の手帖には大正三年國有林無人島として記されてあつた。大正六年八月、保健調査會委員をして國立の敷地を探すべき內命を受けた當時、瀬戸內海は勿論のこと、沖縄から臺灣にまで適地を探がして歩いた。私は數萬の癩に對し寒地より暖地を選むがよい、而して安住の地は琉球の果ての西表島であると復命した。同島は氣候四時溫暖、相當の廣袤を有し、ヒリッピンのクリオン島にも劣らぬ適地であると思ふたからである。然るに賢明なる政府の當局は餘り絶海の孤島で、交通運輸に不便なるのみならず、癩患者の處マラリヤの流行地であるから、米國政府が其屬領地の癩民を驅つて絶對隔離を斷行する樣に、日本の癩患者を移送する事が出來るか疑はしい。それよりか瀬戸內海か知らぬ火內海に適當な島が選ぶがよい、と云ふ意見も有つた。次官及衛生局の諸官が懷かれた。而して歐洲戰爭は終了して、財界は日增に不景氣になり、癩の積極的隔離も不安になつた。大正八年、保健衛生調査會の壹萬人離隔を必要とする意見は割引せられ、先づ大正十年より大正十九年間に五千人迄擴張收容する案が實行せらるゝ事になつた。其間四千五百人は既設五ヶ所に、一ヶ所は五百人の收容する國立療養所を新設する事になつた。大正十四年頃大阪療養所移轉擴張反對の議論は端なくも國立療養所火線となつた。昭和二年國立癩療養所の豫算が可決せられ、山田衛生局長は瀬戸內海の一島を撰擇するべく私に命ぜられた。私は瀬戸內海以外にも候補島を提案したけれども斷乎として拒絶せられた。其理由は海路長き所は冬期の島の遭難者の救護困難なるに反し、陸路は人國者の辛苦の感染である。故にわれた現在に感謝しつゝ未だ故はれざる萬象の病友を思ふ切々の言葉に、讀者は何を思ふであらうか。來れ療養所へ、皆に來が愛生園は全部療養所は相續員、如何でもなく願い法題に苦みつた。

讀者よ。

この四篇は園に寄せられた、感謝、感激、希望、謳歌さ面して、故はれざる病友を思ふ切なる念願を記録された。

生活と療養——

生き行く悦び

T Y 生

此頃の私の心は、自分の是からの生き方に就て、生命の神祕に就て、自然の靈妙さに就て、深く深く考へるやうになつた。そして今まで自分の歩んで來た人生行路を省みて、私は尊い人命の一部分を無意義な事に浪費して來た事について、一種無恨に似た悔湧き出つるのをどうすることも出來ない。

私の心を此の樣に變化せしめ、啓發して與れた動機は實に此の不治の病に罹つた事であつた。その點に於て、私は此の病氣になつた事に對して有難いとさへ思つてゐるのである。

私が社會に居た當時は、生命の奧深さを輕視するか、眞の生活に就て思惟するとか、自然に親むとか云ふやうなことは殆どなかつたのである。否な出來なかつたのだ。日々の學課に追はれ追つの學生生活、人間をして一機械化しめる都市勞働生活、その上に長い間のあま苦しい都會生活は、私の心を疲弊せしめ、中毒せしめて、本來あるがまゝの純な精神を、功利的な、俗塵な、しみだらけのヴェールで蔽蓋にも包んで仕舞つた。

そして社會的な名譽、地位を以て此上もなき尊いものとし、羨望憧憬の對象とした。

私が病氣に罹つたのは、學校を卒業し、說職も首尾よく行つて、やれこれで一安心といふ時であつた。

煩かしい社會生活の第一歩に於て、早くも私は人生の落伍者となつたのだ。幸福の絶頂から悲歎のどん底につき落されたのだ。私はこの大きな我身を變轉に對して、一時は全く正然自失、自分のとるべき道を失つて仕舞つた。然し時は遂ての事件に解決を與て與れる。悲歎のどん底より諦觀へ、諦觀より恬淡へと私の心はわづか半年の間に目まゝ苦しい變化を繰り返して來た。そして現在の私に見る角も此の度の罹病に就て、次のやうに解り得るやうになつた。

「私が病氣になつたのは神の架し惠賜からだ。わづらはしい社會生活の入口に於て、神は私の生活の方向を正しい方に轉換して下さつたのだ。」と。

感謝、私は病氣に罹つた事を今では少しも悲觀してはゐない。

今若し私の自由が許されるならば、私は全國を遍歷する

同胞に訴ふ

"敎はれざる病友へ"

入園者　樹愚憲之

私は大和の紅葉の名所流れる櫻川の片田舎の一農家に生れ幼少の時から微弱に育てられたが紅葉は至つて入情味の有る優しいもので私を樣で為を驚業業績雪を受け折れふる右足の指指が二年過する內に腐やの手足の指が病氣でないかと心配して居るこゝある雜誌の中から弱石榮生病院の記事を見出し榮生病院に問合せの手紙を出すこと一日も早く來て療養をなさいとの返事が來ました。聞もなく身仕度して船田神社に參拜し家內一同の健康を祈願し家を出て榮生病院に入園者の一人となつたのは昨年の十月十日でした。

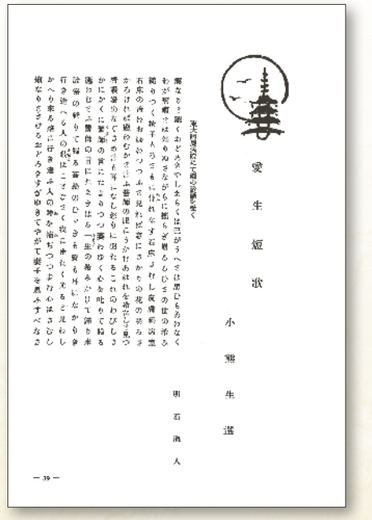
私は入園の當日から一生涯の生活の方向を定めました。

入園者の率直な感想とされ、4名の感想を掲載した「同胞に訴ふ」（第5巻第5号）

■ 右上：初代園長・光田健輔（1876-1964）が創刊号に掲載した「長島の選択」／右下：園における出来事を記す「愛生日誌」（同号）／左上：ＴＹ生「生き行く悦び」（第2号）／左下：「入園者の率直な感想」とされ、４名の感想を掲載した「同胞に訴ふ」（第5巻第5号）

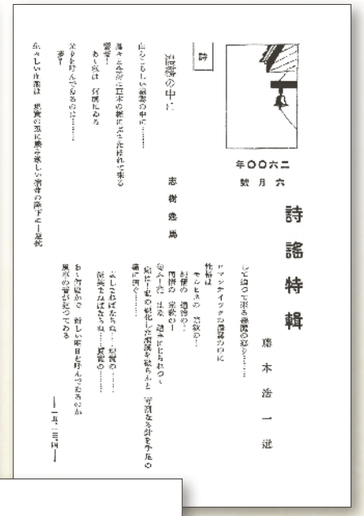
■ 写真：楓苗を奉持する子どもたち（1934年5月、長島愛生園蔵）

創作活動——

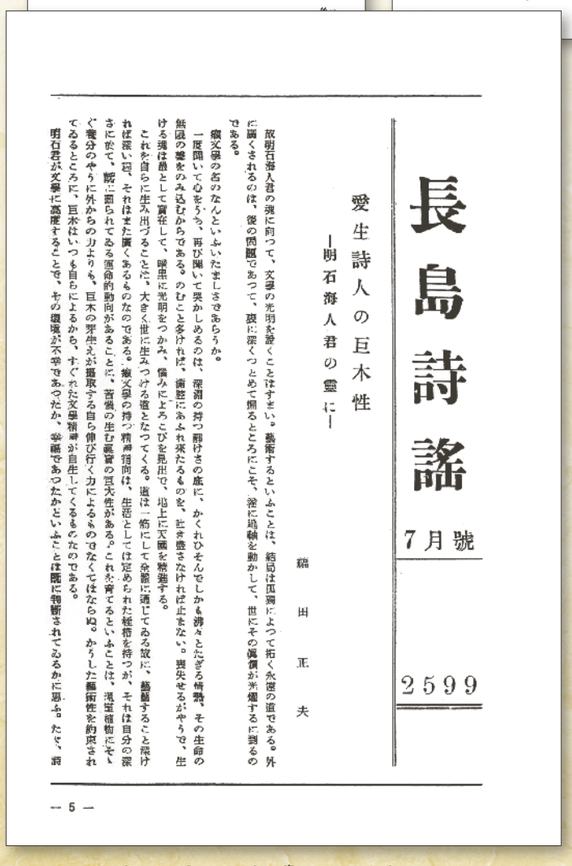


愛生短歌　小鷹生遥

詩謠特輯　鶴本治一郎



詩謠特輯　鶴本治一郎



長島詩謠　7月號　2599

愛生詩人の巨木性

—明石海人君の靈に—

藤田正夫

故明石海人君の魂に向つて、文學の光明を說くことはすまい。藝術するといふことは、結局は孤獨によつて拓く永遠の道である。外に訴くされるのは、彼の悲願であつて、彼に深くつゝめて惱むところにこそ、從に鳴軸を動かして、世にその眞價が光輝するに到るのである。

癩父樣の苦のなんといふいたましさであらうか。

一度聞いて心をうち、再び聞いて哭かしめるのは、深淵の持つ神秘さの底に、かくれひそんでしかも湧々とたぎる情熱、その生命の無限の響をのみ込むからである。のむことを為ければ、病苦に上あふこびを見出で、出上に天籟を解釋する。

これを自らに生死出ずることに、大きく世に生み つける道とかつて、生死としては定められる結構を持つが、それは自分の深れ出て来い時、それはまた廣くあるものなのである。癩文學の持つ精神預言は、生死に上あふこびを見出で、出上に天籟を解釋する。

さに於て、既に聞られてゐる宿命的動向があること に、苦悩の生む眞實の巨大性があるこれを育てるといふことは、現至植物に於て、自分のやうに外からの力よりも、巨木の野生えに眞理する自己傳が行つ力によるものでなくてはならぬ。かりに藝術性を約束されてゐるところに、巨木はいつも自に によるから、すべれた文學精神が明石君が文學に高度すること で、その環境が不幸であつたか、幸福であつたかといふことは問題に物語されてゐるかに思ふ。ただ、詩

「僚友外島に捧ぐ」——

遭難者の記録

あゝ私は助かつたが

無慙!! 犧牲者は

岩國初彦

外島の遭難者中幸ひに生存した四百二十三名は全國の各官公立療養所に一時委託療養さるゝことになつた。

長島には第一回四十九名、二回十一名、三回十八名といふ樣に計七十八名の兄弟姉妹が遊られて來た。以下數篇はその兄弟姉妹が自らの苦しかつた記憶をも一度呼びもどしてものされたもの、舊に涙の記錄である。

あゝ私は助かつたが　無慙!! 犧牲者は

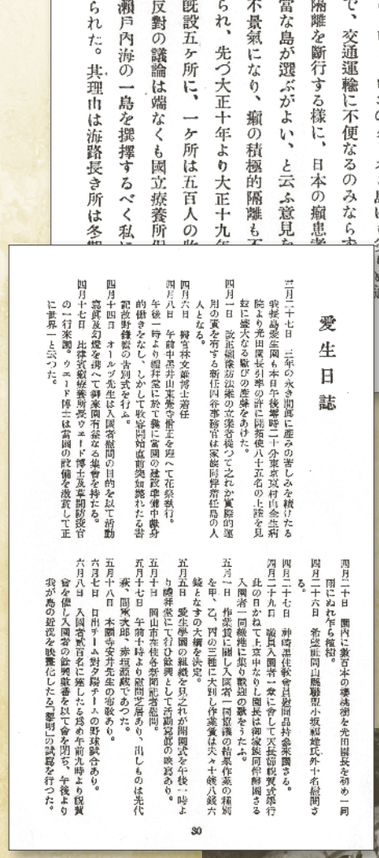
惨しみは愛生園の九月廿一日午前八時に一朝にして我等の樂園は壊滅された、歴史的既の災禍如何に大災とは言へ、光明も慶愛溢れなき狀態と化さしめたことは誠に痛惜に堪へざる次第である。我等の理想郷榮園の新築工事は着々と進み落成慶賀を目前に控へて待ち大百の兄弟姉妹は如何に奮起し喜悦して日々の奉仕に汗と涙を注いだことそ、何時の日に吾等六百の兄姉は今日の喜目を見樣とは？

嗟ありし日の我等の學園を追懷するに只だ感慨無量である。

商工業の中心地とは言ひ乍ら淡りにも御祭しい外出の夜である。訪れるものはかすかに聞ゆる鼓の音。遠雷の音のみ。

未だ八時と言ふに何時しか闇らかな夢を誘んでゐた、何うしたはづみであつたのか夢は破めてラヂオに耳をかすと天氣豫報の時刻であつた。其の強襲く神經をさすものが。

それは？「颱風襲來の恐れあり」の警報だつた。然し「大したことはあるまい」と思ひ



愛生日誌

■ 写真：楓苗を奉持する子どもたち（1934年5月、長島愛生園蔵）

昇天

英靈に捧ぐ

山田晴美

外島の病友達よ

九月二十二日は全くいゝ月夜だつたね。

その夜です。

貴郎達が堤防の叢に淡い夢を疲れて結んでゐるときなんさ、どうでしよう

さん然さ輝く永劫の姿さ化した白衣の人が

しかも一人の病友を背負つて

ある無慙な下界を見下しつゝ

遙かに遙かに昇天して行つた。こある者は云ふ、

私もそれを信じて聽いた。

そして其時私は或る得難いものを拾つたのです。